攻撃の動機と対人機能

大阪教育大学 大 淵 憲 一¹

Motives and interpersonal functions of aggression

Ken-ichi Ohbuchi (*Department of Psychology, Osaka University of Education, Tennoji-ku, Osaka 543*)

In this review, the author theoretically and empirically examined motives and interpersonal functions of aggression. A factor-analysis of Averill's questionnaire items on anger revealed that motives involved in aggressive responses were clustered into two groups: the hostile and the instrumental. It was also clarified that an individual is likely to engage in aggression particularly when some hostile motives are evoked. Concerning the interpersonal functions, the author proposed that aggression might serve four principal goals. (1) Aggression can be generated as an avoidance response to an aversive stimulus, such as frustration, annoyance, or pain, and so on. It depends on the severity of the stimulus. It was however emphasized that aggression is also mediated by social cognition, such as an attribution of intent to a harm-doer. (2) Aggression can be used as a means of coercing the other person into doing something. An individual is likely to use such a power strategy if he/she is lacking in self-confidence or a perspective for influencing the target person by more peaceful strategies. (3) Aggression can be interpreted as a punishment when it is directed toward a transgressor. In this case, aggression is motivated by restoration of a social justice, and thus its intensity is determined by the perceived moral responsibility of the transgressor. Further, it was indicated that aggression is intensified if it is justified as a sanctional conduct against the immoral. (4) Aggression can be also evoked when an individual's social identity is threatened. It was suggested that impression management motives are involved in aggression by an unexpected finding that the presence of audience or the identifiability rather facilitated retaliative aggression. The aggression-inhibition effect of apology was also explained in terms of impression management. In conclusion, it was presented that aggression is a behavioral strategy as an attempt to resolve interpersonal conflicts including physical or psychological annoyance, the other person's disobedience, perceived injustice, and a threat to one's social identity. Whether one's aggression is performed or not depends on a number of intra- and inter-personal determinants, particularly on social cognitive processes such as attribution, inference, prediction and other judgements.

Key words: aggression, anger, motive, interpersonal function.

本稿の目的

ひととは何故攻撃するのであろうか。人間にはサディスティックな本能があるという説もあるが、人々の間に起こっている実際の攻撃行動を観察すると、彼らが、自分のコントロールを超えた盲目的な衝動に振り回されているだけとは考えにくい。多くの攻撃行動は、むしろ、何らかの現実的な目的を達成する手段として、個人がその場面で選択した戦略行動 (strategic behavior) とみなすことができるのではないと思われる。つまり攻撃行動とは、直面した危機を回避したり、困難な問題を解決するために、個人が試みるひとつの適応行動ではないかと思われる。

しかし、個人が攻撃行動を選択する内的過程は必ずしも理性的なものではないし、事実、それが社会的に好ましくない結果をもたらすことも少なくない。しかしそれは、攻撃行動の選択されやすい場面というのが、元々困難な適応課題 (身体的危険、社会的名誉や自己評価への脅威、など) を含んでおり、もっと穏やかな戦略では解決が望めない (と、少なくとも個人は判断する) ことが多いせいでもあろう。いずれにしても、その内的過程は複雑で、従って、そこに作用する要因も様々であろうと思われる。

本稿は、攻撃行動が発現する心理学的過程について、始めは、“動機” という伝統的な概念を手掛りに検討し、後半では、それを基に、攻撃の“対人機能” として問題を展開してみたい。

¹ 本稿の作成にあたり、琉球大学法文学部の東江平之教授から貴重なご示唆を賜りました。

攻撃の基本的概念

攻撃の定義をめぐるのは、過去様々の議論が行われてきた (Siann, 1985 参照)。その中には重要な問題も含まれているが、本稿の主旨から見て、ここでその議論の詳細に立ち入る必要はないと思われる。ただし、従来の諸研究を取り上げて一定の枠組みで論ずるためには、それに先だって、扱っている現象に関する最小限の定義は必要であろうと思われる。その意味でここでは、攻撃 (aggression) を“他者に対して有害な刺激を与えようと試みる行動”と定義しておきたい (Baron 著 度会訳, 1980; Buss, 1971)。

ここには攻撃が (1) 他者への有害な効果を伴う行動であること、(2) 有害な効果が生ずることを行為者が望んでいる (意図がある) こと、の2点が含まれている。ただし、後者の意図の有無自体がひとつの複雑な社会的判断であり、従ってどのような行動を人々が“攻撃”と知覚するかも、ひとつの重要な研究テーマである (Mummendey, Linneweber, & Loeschper, 1984)。いずれにしても、この2点は、多くの実証的攻撃研究者によって共通に認められてきた攻撃の基本要素である。

社会的ラベルという視点

定義をめぐる議論には深入りしないと先ほど述べたが、本論に入る前にひとつだけ述べておきたい見解がある。これは、本稿において攻撃の動機と対人機能を論ずる上で、基本的な視点のひとつとなる考え方だからである。

既に触れたように、攻撃行動の本質については、精神分析に代表されるように、これが攻撃本能とか破壊衝動と呼ばれる特有の内的動因状態の表現であるという力動的な見方が以前は強かった (Hartman, Kris, & Lowenstein, 1964)。しかし、近年は Bandura (1973) のように、攻撃行動をひとつの (対人) 行動の形態を指す名称 (label) にすぎないとする見方の方が強くなってきたようである。この方が、攻撃行動に関する実証的資料を検討する際に有効であることが次第に認められて来たからであろうと思われる。もちろんこの行動形態の定義としては上で述べた2点である。

本稿も、基本的にはこの立場で以下の論を進めるつもりである。この立場を取るひとつの明瞭な利点は、攻撃行動にのみ特有の行動メカニズムがあると考えられるのではなく、攻撃も他の対人行動と本質的には同じメカニズムに従って起こる、と仮定できる点である。帰属などの認知過程によって攻撃行動が制御されていることや (例えば, Ferguson & Rule, 1983; Sarason & Sarason, 1984)、攻撃行動の発達において学習過程の重要性が明らかにされてきたことなどは (例えば, Bandura, 1983; Goldstein, 1983)、このアプローチを支持するも

Table 1

怒りの動機 (大淵・小倉 (1984) より作表)

動 機 項 目	選択率 (%)
関 係 解 消	21.1
嫌 悪 の 伝 達	31.2
単 純 な 仕 返 し	39.4
過去への罪への仕返し	39.2
債務から逃れる	20.6
面 目 を 保 つ	39.6
自分のための行動規制	38.4
別 の 期 待	28.5
関 係 強 化	22.4
相手のための行動規制	66.3
うっぶん晴らし	24.0

のである。

攻 撃 の 動 機

個人はどんな時、何の目的で攻撃しようとするのか。ここでは、これを攻撃の動機と呼ぶことにして考察したい。もちろん上で述べたように、攻撃とは他者に苦痛を与える目的で行われる行為である。ここでは更にその上位の目的、即ち、何のために相手を苦しめようとするのかを問題にしたい。このような意味での攻撃の動機は様々であろうと思われるし、個々のケースに特異なものかもしれないが、それらを整理・分類することは可能であろうと思われる。

激しい攻撃行動の動機

暴力行為の3つの動機 殺人のような暴力犯罪については、その動機の主なものとして、金銭、復讐、名誉の3つの動機がよく知られている (Wolfgang, 1958; Zillmann, 1979)。これは犯罪捜査で用いられる経験的な分類法でもあり、それなりの妥当性は認められよう。

これらはお互いに重なりあっているが、この内、名誉動機にはふたつの種類がある。ひとつは、侮辱された人が激情に駆られて行う暴力などで、そこでは自己評価の損傷が怒りの原因になっている (Goldstein, 1975)。名誉動機のもうひとつの種類は、仲間から臆病と言われるのを恐れて暴力的にふるまう非行少年などにみられる。犯罪学者たち (例えば, Toch, 1969) によると、非行集団などには、攻撃性を“男らしさ”として価値づける文化があるために、少年は仲間内での地位を上げたり評判を落とさないように、敢えて乱暴な行為をすることがある。

日常的攻撃行動の動機

暴力行為のような激しい攻撃行動については、今挙げたような動機が主なものであろう。しかし、攻撃行動の動機として、ほかの動機が考えられないわけではない。

取り分け、一般の人々の間に日常見られる穏やかな攻撃行動については、もっと多様な動機が考えられるであろう。

怒りの動機 Averill (1979) は、日常的な対人経験の中で、個人が怒り (anger) を感じた時に示す反応傾向やその反応の目標 (動機) を調べる質問紙を作った。Table 1 は彼の質問紙“怒りの経験”の一部で、怒りの動機を測る項目のリストである。これを使った調査結果は、アメリカ人を対象にした Averill (1982) 自身の研究、および日本人を対象にした大淵・小倉 (1984) の研究に見ることができる。

Table 1 の数値は、日本人の成人と大学生を対象に調査を行った大淵・小倉 (1984) の結果で、怒った時に各動機が喚起されたと答えた人の割合を示している。この表から分かるように、“仕返し”などの報復動機は約4割の被験者に見られたが、それよりも“相手の行動を変化させたい”という規制動機が、怒りに際してもっと一般的に見られる動機であった。

また、怒りの動機の中には、相手に対する敵意 (hostility) を全く含まないと思われる動機も少なくなかった。例えば、危険なことをした子どもを親が叱る場合などがそうであろうし (“相手のための行動規制”)、また人々は、怒りによって相手の注意を引き、相手との関係をむしろ強めたいと願うこともないわけではなかった (“関係強化”)。このように、怒りのもとで喚起される動機は多様であるが、これらと攻撃行動の関係はどうだろうか。

大淵・小倉 (1984) によると、怒った人の9割が何らかの攻撃行動を行いたいと願望した (それを実行した者は6割であるが)。従って、怒りのもとでは、ほとんどの人が攻撃に動機づけられるので、Table 1 の怒りの動機は、多かれ少なかれ攻撃に関連した動機であるとみなすことができる。しかし、各動機と攻撃との関連の強さは必ずしも同じではないであろう。

動機の構造と攻撃行動の関係 大淵・小倉 (1985) の因子分析的研究によると、これら怒りの動機項目は、相手に対する敵意を含む敵意的 (hostile) 動機群と、敵意を含まず相手の行動のコントロールだけを目的とする道具的 (instrumental) 動機群に分類することができる。因子負荷量から判断すると、Table 1 の上位5項目は敵意的動機とみなされ、残りの項目は道具的動機とみなされる。

大淵 (1986b) が、これらの動機因子を説明変数に含めて、攻撃行動の要因分析 (数量化分析Ⅰ類) を行っている。その結果、敵意的動機が強く喚起されていればいるほど、人々は攻撃行動を強く願望し、またそれを実行することも多かった。そこから、敵意的動機と攻撃行動の関係の強さがうかがえる。ただし、道具的動機も、攻撃

反応と負の関係にあるわけではなく、この動機のもとで攻撃行動が起こることもないわけではなかった。先に述べた親のしつけ行動などはその典型例であろう。

以上の研究が示すように、攻撃行動の動機は極めて多様であるし、また攻撃に固有の動機というのも少ないのではないかと思われる——“報復”や“仕返し”は攻撃に固有の動機かもしれないが、攻撃を対人行動のある形態を表わす名称にすぎないと考ええるなら、それは様々な目的のために、その手段として使用されうるのであると思われる。犯罪研究において重視される3動機は、頻度が高いという点で実用的であるが、それが攻撃動機のすべてではないことは強調されるべきであろう。

攻撃の対人機能

動機とは、ここでは行為者自身が意図した反応の目的を指す用語として使われてきた。しかし、攻撃行動が人と人との間で起こる時、それがもたらす様々な効果を記述するには動機概念だけでは不十分のように思われる。ひとつの攻撃行動は、行為者自身、標的人物、それに観衆に対して、その心理面 (認知、情動) と行動面に多様な影響を及ぼす。行為者自身が動機として意図したものは、その影響のごく一部にすぎないと思われる。そこでここでは、攻撃行動が生み出すこのような多様な対人効果を攻撃の機能と呼び、動機よりも広い観点で考察してみたい。

心理学においてこれまで実証的に研究されてきたところを振り返ると、攻撃の対人機能を検討するに際して、いくつかの枠組みに分けて行うのが良いように思われる。ここでは、“回避反応 (avoidance response) としての攻撃”、“強制 (coercion) としての攻撃”、“制裁 (punishment) としての攻撃”、それに“印象操作 (impression management) としての攻撃”の4つに分けてみた。これらの枠組みは体系的というよりも、研究群のまとまりに基づくもので、意味的にもそれらの間には重複があり、むしろ攻撃の機能を理解するいくつかの観点とみなすべきものである。事実、ひとつの攻撃行動は、複数の観点から眺めて初めてその機能が理解されるということが少なくないであろう。

以下、これらの観点から攻撃の対人機能を記述し、その背後にある心理学的過程とその要因について検討してみたい。

回避反応としての攻撃

欲求不満、不快、被害 攻撃行動の実証的研究を動機づけた画期的な理論は欲求不満説 (Dollard, Doob, Miller, Mowrer, & Sears, 1939) である。攻撃が不快に動機づけられた反応であるという重要な考え方は、この理論によって初めて体系的に論じられた。しかし、狭義の欲求不満説は、その後の検討の結果、いくつかの修

正を余儀なくされた（例えば、Berkowitz, 1962 ; Geen, 1976 ; Mackal, 1979）. その主なものは、第 1 に、欲求不満は常に攻撃を引き起こすわけではないこと、第 2 に、攻撃は欲求不満によってのみ引き起こされるわけではないことであった。

欲求不満の概念をどう考えるかにもよるが、第 2 の批判の線に沿って、今日では、狭い意味での欲求不満だけでなく、個人にとって苦痛や不快、あるいは不利益をもたらすあらゆる他者の行動が攻撃の挑発原因になりうるという主張が多く、研究者から支持されている (Baron, 1983 ; 大淵, 1984 ; Zillmann, 1979). これに従えば、攻撃とは、予想される危害 (harm) を回避したり、受けた被害を回復するために取られる行動であるとみなすことができる。正当防衛のために取られる攻撃行動などはその最も分かりやすい例である。

攻撃応酬 (reciprocation of aggression) 攻撃反応が被害の回避やその低減に動機づけられていることを示唆する証拠は、攻撃交換実験に見られる。よく使われる反応時間競争 (competitive reaction time) パラダイムでは、被験者がサクラの対戦者と反応時間を競い、その勝敗によって電気ショックや不快な雑音を数十回与え合うことによって、攻撃交換を行う。その典型的なものとして、大淵 (1979) の実験を紹介する。

ここでは被験者は、回を追うごとにショックを強めて

Fig. 1. 対戦者のアタックに対する被験者の攻撃反応強度 (大淵, 1979 より図を改題したもの)。

攻撃交換実験では、対戦者から被験者に向けた攻撃をアタックと呼ぶ。この実験では両者は 1 ブロック 20 回、合計 60 回のショック交換を行ったが、被験者は、回が進むにつれて次第に強いショックを向けてくる対戦者か (強アタック)、反対に次第にショックを弱めてくる対戦者 (弱アタック)、あるいは、終始中程度の強さのショックを使う対戦者 (中アタック) のいずれかと対戦した。この 3 条件において、被験者が対戦者に与えたショック強度が上の図である。

くる対戦者か、逆に次第にショックを弱めてくる対戦者、あるいは中程度のショックに終始する対戦者のうちのひとりと対戦した。この時被験者が対戦者に反撃しようとして選んだショック強度の変化は、Fig. 1 に示すように、対戦者の攻撃パターンにほぼ対応するものであった。この結果から、被験者はショックによる苦痛が激しくなると対戦者の加害行動を変えさせようとして攻撃を強めるが、苦痛が弱くなるとその必要がないので攻撃を弱めたと推測できる。それ故、このような攻撃応酬パターンは、攻撃反応が苦痛の回避に動機づけられていることを示す証拠と考えられる。

悪意の帰属 (attribution of maliciousness) 大淵 (1979) の実験は、被害が大きければそれだけ攻撃反応も激しくなることを示しているが、攻撃反応の強度を決めるものは単に被害の物理的大きさだけではなく、そこにはほかの要因も関与している。特に注目されてきたのは、相手の意図 (intent) の知覚である。

攻撃交換実験では、被験者はショックが与えられると同時に、対戦者がどの強さのショックを選んだかもラン

Fig. 2. 回避反応としての攻撃行動の要因モデル (大淵, 1986b より作図)。

状況変数は被害事態あるいは加害者の行動、加害者の特性、およびそれ以外の環境要因から成る。個体内変数とは、ふたつのグループから成り、ひとつは状況変数の作用を受けて攻撃反応を生み出す内的媒介過程で、それはさらに、認知過程 (認知判断、先行情報) と情動過程 (怒りの喚起、他の動機やその時の覚醒状態) に分けることができる。別のグループの個体内変数は人格要因と呼ばれているもので、認知過程や情動過程のはたけにに対して個人に特有の偏りをもたらす様々な人格特性から成る。発達変数は、その人格要因の形成に関わった発達の諸条件を指す。

ブ表示によって伝えられる。Greenwell & Dengerink (1973) や Ohbuchi & Kambara (1985) は、対戦者の意図を示すこのランプ表示と実際のショック強度を逆にした実験を行っている。それによって被験者は、対戦者の意図とは反対の被害を受けるわけだが、被験者の攻撃反応はこの時も被害の大きさに比例するだろうか。ところが、結果はこの予想と全く反対だった。被験者は実際に自分が受けたショック強度とは無関係に、自分に強いショックを与えようと“意図した”対戦者に対して強い攻撃を行ったのである (Fig. 3 参照)。

この結果を、Dengerink & Covey (1983) は次のように解釈している。悪意を持って攻撃してくる対戦者の行動を変えるためには強い反撃が必要であるが、悪意のない相手の行動を変えるには弱い反撃で十分であろう、と被験者は考えたのではないかと。上の実験の被験者にとっては、従って、推測された対戦者の意図は、対戦者の加害行動 (harm-doing) を変えさせるのにどれくらい強い反撃が必要かを定める手掛りになったと考えられる。このように相手の行動規制という観点から見ると、受けた被害の大きさ自体よりも、知覚された相手の意図の方が重要な情報とみなされるのはもっともなことであろう (Heider, 1958)。

要因モデル Greenwell & Dengerink (1973) や Ohbuchi & Kambara (1985) の実験結果が示すように、被害に対する反応としての攻撃も、実は意図の帰属のような認知過程によって媒介されている。被害を回避するために有効な反応はもちろん攻撃だけではない。逃避もあるし、ある時には哀願の方が有効なこともある。どの対人戦略が有望か、もし攻撃するとしたらどれくらいの強さで行うべきか、このような点について、個人は多くの情報を検討して決定するものと思われる。大淵 (1986b) によると、この攻撃反応の決定に影響を与える要因としては、被害自体の外に、加害者の属性 (性別や意図の帰属、加害者・被害者の関係など) とそれ以外の状況要因 (観衆や物理的環境の特徴など)、内的媒介要因 (認知判断、情動過程)、それに個人のパーソナリティ要因 (攻撃反応の学習、帰属の偏り、情動傾向など) などが挙げられる。これらの要因間には、Fig. 2 に示すような影響関係が考えられるであろう。

強制としての攻撃

これまでの検討で明らかになってきた点は、攻撃には他者 (特に加害者) の行動を変化させる目的が含まれていることである。この点を強調したものが、Tedeschi (1983, 1984) の社会的影響理論である。彼によると、攻撃とは強制 (coercion) の手段として採られる行動形態である。

社会的影響、強制、攻撃 他者の判断、態度、行動などに対して、自分が意図した方向の変化を与えることを

社会的影響 (social influence) と呼ぶ。その手段には様々のものがあって、情報の操作によって影響を与えようとする試みは説得 (persuasion) と呼ばれている。また、行動療法のように、報酬による影響の方法も心理学においてはよく知られている。これらとは別に、罰を使って他者の行動に影響を与えようとする試みが強制で、Tedeschi によると、これが一般に“攻撃”と呼ばれる行動になりやすい。大淵・小倉 (1985) が怒りの道具的動機と呼んだものは、この機能を表わすとみてよいであろう。

強制としての攻撃は、威嚇 (おどし: threat) という形態を取りやすく、実際には実害を与えるに至らないことが多いが、その能力があることは被害者に十分印象づけておかねば効果がない。強制としての攻撃は、日常生活では、親や教師による子どものしつけ・指導としてよく用いられる。また犯罪の分野でも、恐喝や強盗などの多くのケースがこの枠に含まれるであろう。

ところで、様々な社会的影響の方法があるのに、なぜ個人は攻撃のような強制的手段に訴えようとすることがあるのだろうか。これは恐らく、懇願や説得などの穏やかな手段が有効ではないと判断した時であろうと思われる。Tedeschi, Gates, & Rivera (1977) は、個人のこのような判断を左右すると思われるいくつかの要因を挙げている。その内ここでは、“自信の欠如”と“時間的展望”を取り上げて検討してみよう。

自信の欠如 Tedeschi et al. (1977) によると、他者を自分に従わせる専門性、地位、権威、個人的魅力などに自信がない個人は、影響の手段として強制を使う傾向があるという。攻撃的な個人は自己評価が低いという、しばしば報告される事実はこのことを裏付けるものである (例えば Feshbach, 1970; Mefferd, Lennon, & Dawson, 1981)。また、暴力犯罪が下層階級の出身者に多いことや、非行少年の多くが学力面での不成功者であることなどは (安香・麦島, 1975)、この見解を支持する現実的な資料と言えよう。犯・非行者は社会的に容認される影響手段を欠いている (と思っている) ために、暴力などの強制手段に訴えることが多いものと思われる。

時間的展望 (time perspective) の不足 既に述べたように、怒りを感じて相手を攻撃したいと思った人のすべてがそれを実行するわけではなかったし、実行するにしても穏やかな行動形態にスケール・ダウンすることが多かった (大淵・小倉, 1984)。このような攻撃の自己抑制はどのようなメカニズムに基づくのだろうか。

攻撃行動の利点は、直接的で即座に結果が得られやすいことである。しかし半面、反撃に出会ったり、社会的非難を招く恐れも高い。そこで人々は、攻撃を実行した時の危険や得失を見積りながら戦略を立て、攻撃は最後の手段として、それ以前にもっと穏やかな影響の方法

Table 2
被害の原因情報の分類 (大淵, 1982a)

不合理な原因	合理的な原因
(1) 攻撃意図：加害者が被害者を苦しめようと意図していた。	(1) 事故：全く偶然の出来事によって生じた被害。
(2) 自己中心的動機：攻撃意図はないが、加害者の身勝手な行動によって生じた被害。	(2) 強制・社会的圧力：加害者は権威者の命令や強制に従って、あるいは合法的役割遂行の結果として、被害者に被害を与えた。
(3) 過失・怠慢：加害者の過失・怠慢・不注意によって生じた被害。	(3) 異常態：加害者が幼年、老齢、心身障害などの異常態にあった。
(4) 情報欠如：被害の発生に関して正当な理由が呈示されないと、人は不合理な原因を推測する傾向がある。	(4) 利他的動機：加害者は被害者の利益のためにその行動を妨害した (たとえば、しつけ)。第三者のためという場合もある。
	(5) 自業自得：被害者自身の不心得や社会的に容認されない欲求行動のために起こった被害。

を試みる人が多いと思われる (Rule, Bisanz, & Kohn, 1985)。つまり、行動の結果に対する見通しを立てることによって、人々は無謀で危険な攻撃は避けようとするものと思われる。

ところが、場合によってはこの時間的展望を十分に行えないことがあり、このような時には衝動的に攻撃反応が生じやすいと思われる。時間的展望を妨げる条件としては、第1に飲酒が挙げられる。Taylor は、アルコールを摂取した被験者が挑発に対して攻撃的に反応しやすいことをいくつかの実験によって示しているし (Taylor & Leonard, 1983)、また、暴力犯罪の70%において加害者が飲酒状態にあると言われることなどからも (Wolfgang & Strohm, 1956)、攻撃と飲酒の結びつきはかなり強いと思われる。

これに関連して、強い情緒的興奮も時間的展望を妨害して、攻撃反応を起こりやすくすると思われる。言うまでもなく、怒りという情緒と攻撃反応の関係は密接なものであるが、Zillmann (1979) によると、他の情緒状態でも攻撃反応が起こりやすくなるという。彼の一連の実験的研究によると、ボルノのような性的刺激に触れたり、身体運動直後のように、被験者が何らかの理由で興奮状態にあると、そうでない状態に比べて、挑発に対してより攻撃的に反応しやすかった。これは、どのような情緒もそれが強いと認知機能を低下させるために、時間的展望が妨げられ、その結果個人は衝動的に反応しやすくなるせいであろうと思われる。

制裁としての攻撃

われわれが日頃、攻撃的な気持ちになったり、それを実行する出来事を振り返ってみると、われわれ自身には直接関係がないのに攻撃的になることがあるのに気づく。たとえば、汚職をして不当な利益を得た公務員の話を知ると“けしからん”と思うし、連続強姦殺人犯に対しては厳罰に処すべきだと主張したりする。これらの

例において、直接被害を受けたわけではないのに、何故われわれは攻撃的になったのだろうか。

応報の規範 (the norm of reciprocity) Felson (1984) によると、個人は不正や不当なことをした人に対して制裁を加えるために攻撃を行うことがある。制度化された公的制裁としては刑罰がある。制裁にはもちろん、前節で述べたような強制としての側面がある。制裁は違反者の行動を矯正するだけでなく、違反を目論む人々に対して、それを思い止まるよう威嚇する働きがあるからである。しかし、制裁の機能はそれだけではない。それは、不正を為した者は、それに相応しい苦しみを受けるべきだという人々の気持ちを反映しているように思われる。これは“目には目を”で知られる応報の規範である。

個人レベルでは、同じ苦しみを味わせてやりたいという動機で行われる報復 (retaliation) あるいは復讐 (revenge) が、制裁としての攻撃にあたる。報復においては、被害の回復や相手の行動変化よりも、敵を苦しめることによって自分の敵意や憎しみを晴らすことが目的であり、そこでは敵意的動機が強く働いている。

公正の回復 Pepitone (1975) によると、制裁のこのような機能は、社会的公正 (social justice) の回復とみることができ、不正を行った者が何の罰も受けないと、われわれは何か自分が損をしたような寂然としない気持ちになる。これは社会的公正が侵され、規範に従っている者が相対的に損をしているという考えを生み出すからである。違反者が罰せられることで、再び違反者と違法者の間に公平が回復する。違反者を罰したからといって、必ずしも被害者の被害を実質的に回復することにはならなくとも、社会的公正が保たれたという心理的回復がはかられるのである。人々のこのような感じ方の背後には、Lerner (1971) が指摘するように、“公正な世界”への信念があるものと思われる。

責任の帰属 (attribution of responsibility) 制裁としての攻撃の強さは、違反者の知覚された“悪さ”，即ちその道徳的責任 (moral responsibility) の程度に比例するであろう。その際人々は、結果として生じた被害の大きさよりも、違反に至った事情あるいは原因を考慮して責任の程度を判定するものと思われる (Nesdale, Rule, & Mcara, 1975; Scharf, Marrero, Lininger, 1981)。従って、原因が合理的な (non-arbitrary) ものであれば、道徳的責任は軽いと見られて違反者は制裁を免れるが、不合理な (arbitrary) 原因であれば道徳的責任は重いとみなされ、厳しい制裁を受けるであろうと予想される。

責任の帰属については Heider (1958) の5水準が知られているが、大淵 (1982a) はこれを基に、被害が生じた場面において通常推定される合理的な原因と不合理な原因を Table 2 のように分類した。不合理な原因が推定されれば、被害に対する加害者の道徳的責任が大きいと判断され、それに伴って、制裁としての攻撃が強められると予想される。大淵 (1982a, 1982b) は、同じ被害状況を描いているが、原因に関する情報を変化させた例話を被験者に読ませて、加害者に対する被害者の攻撃反応を推測させたところ、この予想通りに、不合理な原因ほど被害者の強い攻撃反応を喚起することが確かめられた。

攻撃の正当化 Felson (1984) によると、制裁としての攻撃は正当化 (justify) される。しかし対人間の実際の対立においては、どちらの側が道徳的に“正しい”か必ずしも明瞭ではないことが多い。双方が、自分の側に正義があると主張することもしばしばである。いずれにしても個人は、自分の攻撃が社会的に正当化されるかどうかを重視し、その判断次第で攻撃を実行したり、抑制するであろうと思われる。この点を Ohbuchi & Saito (1986) は ルーレット・ゲームを使った 攻撃交換実験で検討した。

この実験では、勝率を極端に片寄らせて、一方の参加者に明らかに高い攻撃力が与えられることを予め被験者に告げた。この時、攻撃力の差 (power imbalance) が生ずる理由として納得のいく情報を被験者に与えるかどうかで、対戦者の攻撃の正当性が操作された。苦痛回避を目指すのであれば、被験者は、自分より高い攻撃力を持つ対戦者に対しては、挑発しないように穏やかな行動に終始するであろうと予想されたが、この予想は満たされなかった。対戦者からの攻撃に正当性がある場合には、被験者はそれを甘受して反撃を控えたが、反面、不当な攻撃に対しては、一層の報復を招くと分かっているにもかかわらず反撃したのである。この結果は、個人の攻撃を決定するのが彼我の力関係だけではなく、いずれの側に正当性があるかの判断であることを示唆している。

印象操作としての攻撃

80年代に入って、社会心理学では印象操作 (impression management) 理論が次第に支持を獲得しつつある。この理論の基本仮定は次のようなものである。人々は他者の心に映る自分の印象に強い関心を持っており、人々の社会的行動は多かれ少なかれ、この印象を好ましいものにしようとする試みとみられる (Goffman, 1959; Schlenker, 1980)。攻撃反応も社会的行動である限り、印象操作と無関係ではないであろう。

印象操作の戦略 印象操作を目論む個人は、その行動 (会話や身振りを含めて) を通して他者に与える 自分に関する情報を操作しようとする。ある種類の情報は故意に強調し、反面、別の情報からは人々の注意を逸らそうとする。それによって個人は、他者が自分の行動について行う知覚や、自分の動機や性質について行う帰属が好ましい方向に行われるようガイドしようとするのである。他者による知覚や帰属が不利なものになりそうな場合には、それを変更するために別の情報を提供することが行われる。このような一連の行動は印象操作の戦略と呼ばれ、研究者たちによって、弁明 (excuse)、謝罪 (apology)、正当化 (justification)、賞賛付与 (entitling)、高揚 (enhancement) などの 具体的戦略が指摘されてきた (Shaw & Costanzo, 1982; Tedeschi & Riess, 1981)。

攻撃による印象操作：負の印象の拒絶 本稿でこれまで述べたなかでは、仲間“男らしさ”を誇示するために乱暴な行為をする少年の例は、印象操作に動機づけられたものと言えよう。この非行少年の例だけでなく、一般の人々が行う攻撃行動のなかにも印象操作を狙うものがある。ただし、強調されているのは“男らしさ”の印象だけとは限らない。

Felson (1981) によると、攻撃は個人の社会的同一性 (social identity) が脅かされた時に起こる反応のひとつである。同一性の危機とはプライドが傷つけられる、体面や面子をつぶされるという事態で、これらの被害が攻撃反応を起こしやすいことは、Averill (1982) や大淵・小倉 (1984) の調査研究でも明らかであった。印象棄損も被害の一種だから、ここでの議論は既に述べた“回避反応”の範ちゅうに入るが、印象回復のために行われる攻撃には以下に論ずるような独特の問題が含まれている。

同一性の危機とは、個人が好ましくない印象を押つけられそうになることで、その主なものとしては、“弱虫”、“卑劣”、“無能”、“権威がない”、“男らしくない”、“自己中心的”などであろう。これらの事態は侮辱 (insult) として個人に知覚されるが、反撃しないことはこれら負の印象を自ら肯定することになるので、個人はそれを拒絶するために、自分を侮辱する者に対して攻撃反

応を試みるであろう。

ところで、この場合は相手を打ち負かすことが直接の目的ではない。反撃したということ、それによって負の印象を拒絶したことを人々にアピールすることが重要なのであって、攻撃の結果自体は印象操作の観点からは余り重要ではないと思われる。

観衆効果 (audience effect) 印象操作としての攻撃も様々の要因によって影響を受ける。以下、いくつかの要因を取り上げて検討してみたい。最初は観衆効果である。

人がたくさん周りにいれば乱暴な行為は起こりにくいと思われるが、これは必ずしも事実ではない。Felson (1982) の成人を対象にしたインタビュー調査によると、抗争時に第三者が見ていると攻撃反応がむしろ激しくなることが少なくなかった。これは、観衆がいると抗争中の個人にとって印象動機が強められるからと解釈される。ただし、もちろん観衆が示す態度にもよるわけで、攻撃を賞賛する観衆の前では攻撃者はより攻撃的になるが、それを批判する観衆の前では非攻撃的になった (Borden, 1975; Luckenbill, 1977)。この現象も印象操作の観点から容易に理解できる。

非匿名性 (identifiability) フードで顔を覆って、誰か分からない匿名状況を作ると被験者がより攻撃的になる

Fig. 3. 対戦者の攻撃意図と実被害とのずれ、およびその認知と被験者の報復反応 (Ohbuchi & Kambara, 1985).

この実験では、対戦者のアタックがすべて終わった後で、被験者に報復の機会が与えられる。まず、被験者に向けて強いショックを選ぶ対戦者 (高アタック) と弱いショックを選ぶ対戦者 (低アタック) がいる。その各々において、対戦者の意図通りの強さのショックが被験者にもたらされた条件 (非逆転)、意図と丁度反対のショックがもたらされたが、そのことを対戦者が知らないでいる条件 (逆転-非認知)、アタックの後でショックの逆転を対戦者が知らされる条件 (逆転-認知) の3条件が作られた。

という没個性化 (deindividuation) の効果は Zimbardo (1970) の研究によって広く知られるようになった。これは責任の拡散 (diffusion of responsibility) によって攻撃抑制が緩むからと説明されている。しかし時には逆の現象が起こることもある。

Worchel, Arnold, & Harrison (1978) の実験において、被験者は自分のエッセイを別の被験者によって手厳しく批判された。その後被験者は電気ショックを使って報復する機会を与えられたが、この際ショックを行使するのが被験者であることを批判者が知っている条件と知らない条件 (実験者が行使すると思っている) を設けたところ、被験者は自分が報復していることを相手が知っている時の方が知らない時より明らかに攻撃的になった。

没個性化の予測とは矛盾するこの結果は、印象操作の観点から解釈可能である。“無能である”という侮辱を受けた被験者がその負の印象を拒絶するには、自分が報復していることを批判者に伝える必要があった。それ故、被験者は非匿名での反撃を好んだと考えられる。

謝罪 (apology) の効果 実社会では、他人に被害を与えた時には謝罪という行為がよく行われる。我々の日常経験からも、謝罪は被害者の怒りを鎮め、攻撃反応を起こりにくくする効果があるようである。実証的証拠としては、既に紹介した Felson (1982) のインタビュー調査と大淵 (1986 a) による実験的研究によって謝罪の攻撃抑制効果が確認されている。しかし、その効果が生ずる仕組みについては必ずしも明らかでない。ここでは印象操作理論による説明を述べておこう。

この理論では、既に述べたように謝罪は加害者の印象操作戦略のひとつとされている。謝罪は、悪いのは加害者で被害者に落ち度はないことを公的に明らかにし、それによって被害者の傷つけられた社会的印象を回復する機能があるものと思われる (Schlenker & Darby, 1981)。謝罪によって印象回復が成れば、被害者はそれ以上攻撃を行う必要はなくなってしまいうので、加害者の側からすれば報復を受けなくて済むわけである。ただし、被害が印象棄損だけでない場合は、謝罪によって被害者の攻撃を完全に停止させることはできないが、その場合でも攻撃を穏やかにする効果はあろうと思われる。

象徴的攻撃交換 印象操作理論は、個人の社会的行動が他者の認知面への効果を狙う側面を含んでいることを強調するため、象徴的相互作用 (symbolic interaction) 理論のリバイバルと見られている (Tedeschi & Riess, 1981)。次に示す Ohbuchi & Kambara (1985) の攻撃交換実験はそのことを良く表わしている。

被害に対する反応の節で、攻撃反応は被害自体よりも対戦者が悪意を持っていると被験者が判断したかどうかによって決まることを示した。Ohbuchi & Kambara は

さらに、対戦者の攻撃が失敗した際に、そのことを対戦者自身が知っている条件と知らない（即ち、対戦者は自分の攻撃が成功したと思っている）条件を設けた。この時、実被害はなくとも、被害を与えたと対戦者が思い込んでいる時には被験者は実際に被害を受けた時と同じように強く報復した。ところが、Fig. 3 の上のグラフが示すように、攻撃が失敗して無被害だったことを対戦者が知っている時には被験者の報復が低下するのが観察されたのである。この結果は、実被害とは無関係に、“被験者に効果的に打撃を与えた”という対戦者の認知が被験者の攻撃を動機づけたことを示している。下のグラフはこれらとは対照的に、対戦者に加害意図がないのに被験者に被害が生じてしまった状況を表わす。この時にも、被験者が被害を受けたことを対戦者が知っている時は、知らない時よりも被験者は攻撃的になった。

Ohbuchi & Kambara の研究は、対戦者が被害を与えようと意図したかどうかと、実際に与えたと思っているかどうかによって被験者の攻撃が影響を受けることを示しており、象徴的次元において応報の原理がはたらいていることを示唆している。この背景には、印象操作理論家が主張するように (Reis, 1981), 個人は人々から“敗者”として認知されることを避けようとするが、同時に、たとえ抗争中の敵に対しても“フェアでない”という印象を与えたくないという配慮があるものと思われる。

結 論 と 展 望

対人戦略としての攻撃

攻撃には他の対人行動には見られない固有の動機や機能があるのだろうか。仕返しなどの敵意的動機、対人機能としての制裁などは、攻撃以外の行動形態を取ることとはほとんど考えられず、攻撃に固有のものと呼べるかもしれない。しかし、既に見たように、攻撃行動はそれ以外の様々の動機や機能にも奉仕しうるものである。

結論的に言えることは、対人間に起こる様々の問題状況（被害、他者の不服従、知覚された不正、同一性の危機など）を解決するために、個人によって取られる行動戦略のひとつとして攻撃があるということである。攻撃によって解決されやすい状況もあろうし、反対の状況もあろう。いずれにしても、ほとんどの場合、行動選択の余地はあり、攻撃が使われるかどうかは個人の認知過程（帰属、推測、予測、判断など）に依存すると思われる。本稿で示した多くの実証的証拠は、このことを支持するものであった。

近年、対人葛藤場面において、それを自分に有利なように解決する個人の対人技能や戦略が研究され始めている。これはパワー戦略 (power strategy), 影響戦略 (influence strategy), 交渉戦略 (negotiation strategy) など

と呼ばれているが (Falbo, 1977; Selman & Demorest, 1984; Tjosvold, Johnson, & Johnson, 1984), どの戦略を用いるかは主として相手との社会的勢力差に依存し、人々は弱者に対する時ほど威嚇・攻撃のような強い戦略を使う傾向があることなどが指摘されている (Cowan, Drinkard, & MacGavin, 1984; Falbo & Peplau, 1980)。しかしその場合でも、初めは穏やかな戦略（依頼、説得、など）を使い、それが効果を挙げない時に、強い戦略に移る多角的戦略法が一般的であることも明らかにされている (Cowan et al., 1984; Rule et al., 1985)。攻撃行動はこのような対人戦略の一部として、それも最終戦略とでも呼ぶべきものとして位置づけられるのではないと思われる。

攻撃理論の現状と展望

欲求不満説以降、攻撃に関する包括的な理論は生まれていない。ただ、発達と学習 (Bandura, 1973; Berkowitz, 1983; Eron, 1982; Olweus, 1980; Patterson, Reid, Jones, & Conger, 1975), 動機 (Feshbach, 1979; Kornadt, 1984), 情動と認知 (Averill, 1983; Ferguson & Rule, 1983; Zillmann, 1979), 対人機能 (Felson, 1981; Tedeschi, 1983), 病理 (Novaco, 1975), 犯罪 (Athens, 1980), 抑止 (Baron, 1983) など、部分的な現象に関する理論化は数多く試みられ、見るべきものも少なくない。

本稿では、主として攻撃の対人機能を4つの視点から考察した。もちろんここで扱ったのは攻撃現象のほんの一部に過ぎないし、また4つの視点も既に述べたように決して体系的ではない。これらの間には概念的にも重複があり、従って、各視点から提供された資料のなかにも解釈の必ずしも一義的でないものが含まれている。

4視点のうちどれか——特に、被害や強制の概念——を広く解釈すれば、他の視点のすべてがその中に含まれてしまう可能性もある。しかし、それではかつての欲求不満説のようにあまりにも一般化された理論になってしまい、実証的研究を生産的に進める見地からは、むしろ各概念をできるだけ狭く限定して、それらから異なった仮説が派生するように工夫する必要があると思われる。もちろん将来は、従来のものより包括的で体系的な攻撃理論が生まれるであろうが、実証的証拠が整わない現状でそれを焦る必要はないと思われる。

文 献

- 安香 宏・麦島文夫 1980 犯罪心理学 有斐閣
 Athens, L. H. 1980 *Violent criminal acts and actors: A symbolic interactionist study*. Boston: Routledge & Kegan Paul.
 Averill, J. R. 1979 Anger. In H. Howe & R. Dienstbier (Eds.), *Nebraska symposium on motivation* 1978 (Vol. 28). Lincoln: University of Nebraska

- Press. Pp. 1-80.
- Averill, J. R. 1982 *Anger and aggression : An essay on emotion*. New York : Springer-Verlag.
- Bandura, A. 1973 *Aggression : A social learning analysis*. Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice Hall.
- Bandura, A. 1983 Psychological mechanisms of aggression. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression : Theoretical and empirical reviews*. Vol. 1. *Theoretical and methodological issues*. New York : Academic Press. Pp. 1-40.
- バロン R. A. 度会好一(訳) 1980 人間と攻撃 日本ブリタニカ
(Baron, R. A. 1977 *Human aggression*. New York : Plenum Press.)
- Baron, R. A. 1983 The control of human aggression : A strategy based on incompatible responses. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression : Theoretical and empirical reviews*. Vol. 2. *Issues in research*. New York : Academic Press. Pp. 173-190.
- Berkowitz, L. 1962 *Aggression : A social psychological analysis*. New York : McGraw-Hill.
- Berkowitz, L. 1983 The experience of anger as a parallel process in the display of impulsive, "angry" aggression. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression : Theoretical and empirical reviews*. Vol. 1. *Theoretical and methodological issues*. New York : Academic Press. Pp. 103-134.
- Borden, R. J. 1975 Witnessed aggression : Influence of an observer's sex and values on aggressive responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 567-573.
- Buss, A. H. 1971 Aggression pays. In J. L. Singer (Ed.), *The control of aggression and violence*. New York : Academic Press. Pp. 7-18.
- Cowan, G., Drinkard, J., & MacGavin, L. 1984 The effects of target, age, and gender on use of power strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 1391-1398.
- Dengerink, H. A., & Covey, M. K. 1983 Implications of an escape-avoidance theory of aggressive response to attack. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression : Theoretical and empirical reviews*. Vol. 1. *Theoretical and methodological issues*. New York : Academic Press. Pp. 163-188.
- ドラーズ J. ・ドゥーブ L. W. ・ミラー N. E. ・マウラー O. H. ・シアーズ R. R. 宇津木 保(訳) 1959 欲求不満と暴力 誠信書房
(Dollard, J., Dood, L. W., Miller, N. E., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. 1939 *Frustration and aggression*. New Haven : Yale University Press.)
- Eron, L. 1982 Parent-child interaction, television violence and aggression of children. *American Psychologist*, **37**, 197-211.
- Falbo, T. 1977 Multidimensional scaling of power strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 537-547.
- Falbo, T., & Peplau, L. A. 1980 Power strategies in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 618-628.
- Felson, R. B. 1981 An interactionist approach to aggression. In J. Tedeschi (Ed.), *Impression management theory and social psychological research*. New York : Academic Press. Pp. 181-200.
- Felson, R. B. 1982 Impression management and the escalation of aggression and violence. *Social Psychology Quarterly*, **45**, 245-254.
- Felson, R. B. 1984 Patterns of aggressive social interaction. In A. Mummendey (Ed.), *Social psychology of aggression : From individual behavior to social interaction*. New York : Springer-Verlag. Pp. 107-126.
- Ferguson, T. J., & Rule, B. G. 1983 An attributional perspective on anger and aggression. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression : Theoretical and empirical reviews*. Vol. 1. *Theoretical and methodological issues*. New York : Academic Press. Pp. 41-74.
- Feshbach, S. 1970 Aggression. In P. H. Mussen (Ed.), *Carmichael's manual of child psychology*. Vol. 2. New York : Wiley & Sons. Pp. 159-259.
- Feshbach, S. 1979 The regulation and modification of aggression : Commonalities and issues. In S. Feshbach & A. Fraczek (Eds.), *Aggression and behavior change : Biological and social processes*. New York : Praeger Publishers. Pp. 271-286.
- Geen, R. G. 1976 In J. W. Thibaut, J. T. Spence & R. C. Carson (Eds.), *Contemporary topics in social psychology*. New York : General Learning Press. Pp. 242-263.
- Goffman, E. 1959 *The presentation of self in everyday life*. Garden City, New York : Doubleday, Anchor Books.
- Goldstein, A. P. 1983 Behavior modification approaches to aggression prevention and control. In Center for Research on Aggression (Ed.), *Prevention and control of aggression*. New York : Pergamon Press. Pp. 156-209.
- Goldstein, J. H. 1975 *Aggression and crimes of violence*. New York : Oxford University Press.
- Greenwell, J., & Dengerink, H. A. 1973 The role of perceived versus actual attack in human physical aggression. *Journal of Personality and*

- Social Psychology*, **26**, 66-71.
- Hartmann, H., Kris, E., & Lowenstein, R. M. 1964 *Papers on psychoanalytic psychology*. Vol. 4. New York: International University Press.
- ハイダー F. 大橋正夫(訳) 1978 対人関係の心理学 誠信書房
- (Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley & Sons.)
- Kornadt, H. 1984 Motivation theory of aggression and its relation to social psychological approaches. In A. Mummendey (Ed.), *Social psychology of aggression: From individual behavior to social interaction*. New York: Springer-Verlag. Pp. 21-32.
- Lerner, M. J. 1971 Justice, guilt, and veridical perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 127-135.
- Luckenbill, D. F. 1977 Criminal homicide as a situated transaction. *Social Problems*, **25**, 176-186.
- Mackal, P. K. 1979 *Psychological theories of aggression*. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- Mefferd, R. B., Jr., Lennon, J. M., & Dawson, N. E. 1981 Violence: An ultimate noncoping behavior. In J. R. Hays, T. K. Roberts, & K. Solway (Eds.), *Violence and the violent individual*. Lancaster: MTP press.
- Mummendey, A., Linneweber, V., & Loeschper, G. 1984 Aggression: From act to interaction. In A. Mummendey (Ed.), *Social psychology of aggression: From individual behavior to social interaction*. New York: Springer-Verlag. Pp. 69-106.
- Nesdale, A. R., Rule, B. G., & Mcara, M. 1975 Moral Judgments of aggression: Personal and situational determinants. *European Journal of Social Psychology*, **5**, 339-349.
- Novaco, R. W. 1975 *Anger control: The development and evaluation of an experimental treatment*. Lexington, Mass.: D. C. Heath, Lexington Books.
- 大淵憲一 1979 友好刺激に対する無反応としての Hostility 心理学研究, **50**, 249-255.
- 大淵憲一 1982 a 不合理な欲求不満に対する攻撃反応と原因情報 犯罪心理学研究, **19**, 11-20.
- 大淵憲一 1982 b 欲求不満に対する原因情報と攻撃反応 実験社会心理学研究, **21**, 175-179.
- 大淵憲一 1984 犯罪・非行の人格要因 石田幸平・武井楨次(編) 犯罪心理学 東海大学出版会 Pp. 183-220.
- 大淵憲一 1986 a 謝罪の攻撃抑制効果の検討 日本心理学会第 50 回大会発表論文集, 637.
- 大淵憲一 1986 b 質問紙による怒りの反応の研究——攻撃反応の要因分析を中心に——実験社会心理学研究, **25**, 127-136.
- Ohbuchi, K., & Kambara, T. 1985 Attacker's intent and awareness of outcome, impression management, and retaliation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **21**, 321-330.
- 大淵憲一・小倉左知男 1984 怒りの経験(1)——Averill の質問紙による成人と大学生の調査概況——犯罪心理学研究, **22**, 15-35.
- 大淵憲一・小倉左知男 1985 怒りの動機——その構造と要因及び反応との関係——心理学研究, **56**, 200-207.
- Ohbuchi, K., & Saito, M. 1986 Power imbalance, its legitimacy, and aggression. *Aggressive Behavior*, **12**, 33-40.
- Olweus, D. 1980 Familial and temperamental determinants of aggressive behavior in adolescent boys: A causal analysis. *Developmental Psychology*, **16**, 644-666.
- Patterson, G. R., Reid, J. B., Jones, R. R., & Conger, R. E. 1975 *A social learning approach to family intervention*. Vol. 1. *Families with aggressive children*. Eugene, Oregon: Castalia Publishing Company.
- Pepitone, A. 1975 Social psychological perspectives on crime and punishment. *Journal of Social Issues*, **31**, 197-216.
- Reis, H. T. 1981 Self-presentation and distributive justice. In J. Tedeschi (Ed.), *Impression management theory and social psychological research*. New York: Academic Press. Pp. 269-294.
- Rule, B. G., Bisanz, G. L., & Kohn, M. 1985 Anatomy of a persuasion schema: targets, goals, and strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 1127-1140.
- Sarason, I. G., & Sarason, B. R. 1984 Social and cognitive skills training: An antidote for adolescent acting out. In R. M. Kaplan, V. J. Konecni & W. Novaco (Eds.), *Aggression in children and youth*. Hague: Martinus Nijhoff. Pp. 175-191.
- Scharf, P., Marrero, D., & Lininger, R. 1981 Moral reasoning and judgment in hypothetical and actual dilemmas involving the police officer's use of deadly force in the line of duty. In J. R. Hays, T. K. Roberts & K. S. Solway (Eds.), *Violence and the violent individual*. Lancaster: MTP Press. Pp. 35-52.
- Schlenker, B. R. 1980 *Impression management: The selfconcept, social identity, and interpersonal relations*. Belmont, CA: Brooks/Cole.
- Schlenker, B. R., & Darby, B. W. 1981 The use of apologies in social predicaments. *Social Psychology Quarterly*, **44**, 271-278.
- Selman, R., & Demorest, A. P. 1984 Observing trou-

- bled children's interpersonal negotiation strategies: Implications of and for a developmental model. *Child Development*, **55**, 288-304.
- ショール M. E.・コストanzo R. R. 古畑 和孝 (監訳)
社会心理学の理論 I, II サイエンス社
(Shaw, M. E., & Costanzo, P. R. 1982 *Theories of social psychology*. 2nd ed. New York: McGraw-Hill.)
- Siann, G. 1985 *Accounting for aggression: Perspectives on aggression and violence*. Boston: Allen & Unwin.
- Taylor, S. T., & Leonard, K. E. 1983 Alcohol and human physical aggression. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression: Theoretical and empirical reviews*. Vol. 2. *Issues in research*. New York: Academic Press. Pp. 77-102.
- Tedeschi, J. 1983 Social influence theory and aggression. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression: Theoretical and empirical reviews*, Vol. 1. *Theoretical and methodological issues*. New York: Academic Press. Pp. 135-162.
- Tedeschi, J. 1984 A social psychological interpretation of human aggression. In A. Mummendey (Ed.), *Social psychology of aggression: From individual behavior to social interaction*. New York: Springer-Verlag. Pp. 5-20.
- Tedeschi, J., Gates, G. G., & Rivera, A. N. 1977 Aggression and the use of coercive power. *Journal of Social Issues*, **33**, 101-125.
- Tedeschi, J., & Riess, M. 1981 Identities, the phenomenal self, and laboratory research. In J. Tedeschi (Ed.), *Impression management theory and social psychological research*. New York: Academic Press. Pp. 3-22.
- Tjosvold, D., Johnson, D. W., & Johnson, R. 1984 Influence strategy, perspective-taking, and relationships between high- and low-power individuals in cooperative and competitive contexts. *Journal of Psychology*, **116**, 187-202.
- Toch, H. 1969 *Violent men*. Chicago: Aldine.
- Wolfgang, M. E. 1958 *Patterns in criminal homicide*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Wolfgang, M. E., & Strohm, R. B. 1959 The relationship between alcohol and criminal homicide. *Quarterly Journal of Studies on Alcohol*, **17**, 411-425.
- Worchel, S., Arnold, S. E., & Harrison, W. 1978 Aggression and power restoration: The effects of identifiability and timing on aggressive behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, **14**, 43-52.
- Zillmann, D. 1979 *Hostility and aggression*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Zimbardo, P. G. 1970 The human choice: Individuation, reason, and order versus deindividuation, impulse, and chaos. In W. J. Arnold & D. Levine (Eds.), *Nebraska symposium on motivation 1969*. Lincoln: University of Nebraska Press. Pp. 237-307.